浴室

LA SALLE DE BAIN
Jean-Philippe Toussaint

ジャン=フィリップ・トゥーサン

野崎歓・訳

集英社

目

次

パリ　7
直角三角形の斜辺　59
パリ　119
ジャン＝フィリップ・トゥーサン登場　160

浴

室

装丁　木村裕治
協力　コリーヌ・ブレ

パリ

直角三角形の斜辺の二乗は他の二辺の二乗の和に等しい。

ピタゴラス

（１）午後を浴室で過ごすようになった時、そこに居を据えることになろうとは思ってもみなかった。浴槽の中で思いをめぐらせながら、快適な数時間を過ごしていたにすぎない。服は着たままの時も脱ぐ時もあった。エドモンドソンはぼくの頭の横にいるのを好み、ぼくが前より晴々とした様子に見えると言った。ぼくが何か冗談を言って、二人で笑うこともあった。浴槽はやっぱり縁が平行で、背もたれは斜め、底は平らで足置きを使う必要のないものに限る、などと身ぶりたっぷりに力説したりした。

（２）エドモンドソンは、浴室から出ることを拒むぼくの態度に、心を萎ま

せるものを感じていたのだが、それでもぼくの暮らしを助けてくれるのだった。アートギャラリーでパートで働いて家計を賄ってくれていたのだ。

（3） ぼくのまわりには戸棚、タオル掛け、ビデがあった。洗面台は白で、その上にせり出した板に歯ブラシと剃刀が転がっていた。正面の壁には、厚塗りのペンキがところどころ玉になっていて、ひび割れが走っている。くすんだ色のペンキのあちこちにクレーターのような穴がぽつぽつあいている。ひと筋の割れ目が特に広がりつつあるように思われた。ぼくは何時間もその端に目を凝らして、ひびの進行ぶりを突き止めようと空しい努力をした。時々、別の実験を企てることもあった。手鏡に自分の顔を映し、その表情と、腕時計の針の進行とを同時に見較べるのだ。しかしぼくの顔は何もおもてに浮かべなかった。決して。

（4） ある朝、ぼくは物干しロープをはぎ取った。戸棚を全部空けて、棚の物を取払った。洗面道具一式を大きなゴミ袋に押し込んでしまい、蔵書の一部の引っ越しを開始した。エドモンドソンが戻った時、ぼくは、一冊の本を片手に、長々と寝そべり、蛇口の上に両脚を組んだ姿で迎えた。

（5） エドモンドソンはついにぼくの両親に訴えた。

（6） 母さんはケーキを持ってやって来た。ビデの上に腰を下ろし、足のあいだに置いた菓子箱の口を大きく開けて、スープ皿の中にケーキを並べた。心を悩ませている様子で、やって来てからずっと、ぼくの視線を避けている。物悲しげに、元気なく頭を上げ、何か言おうとして口を噤み、エクレアを一つ選

んでぱくぱく食べた。気晴らしをしなければだめよ、スポーツをするとか、わからないけど何かあるでしょ。そう言って口の端を手袋で拭った。気晴らしの必要があるのかどうかは疑問だなあ、とぼくは答えた。ほとんど微笑さえ浮かべながら、ぼくにとって気晴らしほど恐ろしいものはないんだよ、と付け加えると、母さんはとても話にならないとわかったらしく、ぼくに機械的にミルフィーユを差し出した。

（7）週に二回、フランス・サッカー選手権の模様を伝えるラジオのスポーツ・アワーを聴いた。パリのスタジオにいる司会者が、各地のスタジアムで試合経過を追う特派員たちの声をつないで放送するのだ。サッカーの試合は想像してこそ面白味を増す、という意見のぼくは、この放送を逃さず聴いた。熱気を帯びた声の響きに身を委ね、部屋の明かりを消し、時には目をつむって中継

を聴いた。

（8）両親の友人が、パリに立ち寄ったついでにぼくを訪ねてきた。外は雨だよ、と彼は言った。ぼくは腕を洗面台の方に伸ばして、タオルを使うように勧めた。黄色の方にしてください、もう一方は汚れてますから。彼は時間をかけて、念入りに髪を乾かした。一体ぼくに何の用なのかわからなかった。沈黙が支配しそうになった時、彼は自分の仕事の近況を語って、乗り越えがたい困難に突き当たったわけだよ、何しろ同じランクの役職にある者同士が性格的に合わないという問題が絡んでいるんだからね、云々、と説明した。神経質にタオルを使いながら、浴槽に沿って大股で歩き、自分の話に興奮して次第に激してきた。威嚇し、わめきちらした。ついには、ラウールの奴は無責任だ、と叫んだ。私は不可能に挑戦しているんだぞ、不可能にな！　と彼は言うのだった。

それなのに皆私を馬鹿にしおって。

（９）ぼくの身なりはシンプルなものだった。ベージュのズボン、青いシャツに無地のネクタイ。体にぴったりなので、洋服の上からでも、しなやかでしかも逞しい筋肉の持ち主のように見えた。体を横たえ、リラックスして、目を閉じていた。そして、ダーム・ブランシュ〔白い貴婦人〕のこと、あの、丸く固めたヴァニラ・アイスの上に、やけどしそうに熱いチョコレートをたっぷりとかけたデザートのことを考えた。この数週間というもの、考え続けているのだ。といっても、食べたくて仕方がないというのではなく、科学的な見地から、この取り合わせに完璧なるものの一例があると思うのだ。モンドリアンの絵。ヴァニラ・アイスにとろりとかかったチョコレート、熱いものと冷たいもの、堅固さと流動性、不均衡と厳密さ、正確さ。チキンでさえ、いかにぼくがチキ

ンを偏愛しているといっても、とても比較にならない。だめだ。眠り込んでしまいそうになったその時、エドモンドソンが浴室に入ってきて、くるりと一回転してみせてから、ぼくに手紙を二通手渡してくれた。一通はオーストリア大使館からのものだった。櫛を使って開封した。オーストリア人にも外交官にも知り合いなんていないのだから、多分何かの間違いだろう、とぼくは言った。

（１０）浴槽の縁に腰掛けて、エドモンドソンに、二十七にもなって、そのうち二十九にもなるというのに、浴槽の中に閉じこもりがちの暮らしだなんて、あんまり健康とは言えないな、と話した。目を伏せて、浴槽のエナメルを撫でながら言った、危険を冒さなきゃだめなんだ、この抽象的な暮らしの平穏さを危険に晒して、その代わりに。そこまで言って言葉に詰まってしまった。

（11） 翌日、ぼくは浴室を出た。

（12） カブロヴィンスキー。ファースト・ネームは？ とぼくが尋ねる。ヴィトルドです。それは白髪の、灰色の服を着た男で、タバコホールダーを手にしてキッチンに坐っていた。その後ろには、もっと若い男が立っていた。カブロヴィンスキーはさっと立ち上がって椅子をぼくに譲ろうとした。お留守だとばかり思いまして、とんだ失礼を、と詫びた。上がり込んでいることの弁解に、エドモンドソンに頼まれて台所の塗りかえに来たんです、とあわてて説明した。その話なら聞いていた。エドモンドソンが働いているアートギャラリーでは今、ポーランドのアーチストたちの作品を展示している。彼らは一文無しだから、キッチンの塗りかえを安く頼めるわよ、とエドモンドソンが言っていたのだ。

（13） 静かな一日を過ごしていたのに、二人のポーランド人がやって来たおかげでその気ままさがすっかり乱されてしまった。彼らはキッチンを離れずに、エドモンドソンが渡し忘れたペンキをおとなしく待っていた。カブロヴィンスキーは時々ぼくの部屋をノックし、ドアの隙間から顔をのぞかせてあれこれ質問するのだが、ぼくはその都度、何もわかりません、と慇懃に答えた。少し前から、二人の物音がしなくなった。ぼくはベッドに坐り、枕を背に読書をしていた。玄関でドアのばたんという音がしたので、顔を上げた。するとまもなく、エドモンドソンが、顔を輝かせて現れた。彼女はセックスしたいのだ。

（14） それも今すぐに。

（15） 今すぐセックスだって？ ぼくはページがわかるように指をはさんだ

まま、ゆっくりと本を閉じた。エドモンドソンは笑い声をあげて、ぴょんぴょん飛び跳ねる。そしてブラウスのボタンをはずした。ドアの後ろで、カブロヴィンスキーが、朝からペンキを待っていたんです、と重々しい口調で言った。一日無駄になった、まったくわけのわからん一日だ、とぼやくことしきりだ。エドモンドソンは、少しも悪びれることなく、笑顔のままドアを開けて、夕食を一緒に食べましょうと誘った。

（16） エドモンドソンはパスタで唇にやけどした。キッチンの椅子に坐ったカブロヴィンスキーは、思案顔をつくって首をかしげ、考え深げにタバコホールダーの端をしゃぶっている。エドモンドソンが何故ペンキを買ってこなかったのかわかってからというもの（店が休みの日だったのだ）、彼は今日が月曜日であることを嘆いてやまなかった。同時に、今日の分の給料はどうなるのか、

しきりに探りを入れた。エドモンドソンは曖昧（あいまい）な態度を示した。いずれにしても今日はペンキは買えなかったわ、まだ何色にするか決心がつかないの、ベージュでは部屋が陰気になるかもしれないし、白ではどうしたって汚れやすいし、迷っている最中なのよ、と彼女は打ち明けた。カブロヴィンスキーは小声で、明日までに決心するつもりはあるんですか、と尋ねた。エドモンドソンはパスタのおかわりを勧め、彼は、もう結構です、と断った。ハマグリの代わりにイタヤガイが入っている点を除けば、われわれが食べているのはスパゲッティ・ボンゴーレであった。ビールはなまぬるかったが、ぼくはみんなのコップを傾けて注いでやった。カブロヴィンスキーはゆっくり食べている。フォークにスパゲッティをぐるぐる巻きつけながら、ペンキ塗りはなるべく早く開始しなければだめですよ、と意見し、ぼくの方を向くと、社交家っぽい態度になって、建材用グリセリン塗料をどう思いますか、と尋ねてきた。彼は質問の理由を説

明して、その種の塗料の缶が二個、物置に転がっているのが目に入ったものですから、と付け加えた。ぼくは会話からはずれないためだけに、個人的には何も意見はありません、と答えた。エドモンドソンはというと、彼女は断固反対だった。つまり、問題の缶は、そもそも空っぽであるというだけでなく、アパルトマンの前の住人の持ち物だったのであり、それがこの塗料を使わない第二の立派な理由になる、というのだ。

（17）二人の客を送り出してドアが閉まるか閉まらないかのうちに、エドモンドソンは、身をよじりながらスカートとストッキングをずり下ろして、脱ぎ捨ててしまった。だが、ドアのわずかな隙間から、カブロヴィンスキーは別れの挨拶を依然繰り返していた。夕食の礼を述べ、壁に何色を塗るかについては、無頓着な口調を装いながら、ベージュを強く勧めた。エドモンドソンが完全に

ドアを閉めてしまおうとした瞬間、カブロヴィンスキーは、敏捷（びんしょう）な身のこなしで隙間に傘の柄を滑り込ませ、笑顔を見せて許しを乞（こ）いながら、実に素晴らしいお食事でした、とまた別の言葉で礼を述べたてた。少しのあいだ沈黙があってから、カブロヴィンスキーは傘を引き抜き、エドモンドソンが仕切り壁の後ろでパンティを脱ぎにかかっているあいだに、ようやくはっきりした要求を出してきた。お約束の給金の一部を先払いしてはもらえないでしょうか。タクシー代とホテル代が少々入り用なのですが、というのである。しかし、エドモンドソンは負けなかった。とうとうドアに鍵をかけてしまうと、ぼくに向かって微笑み、お尻むき出しの姿で爪先立って、ドアののぞき穴をのぞき込んだ。そして振り返りもせずにブラウスのボタンをはずし始めた。彼女のお気に召すようにぼくもズボンを脱いだ。